企業インタビュー

ピアニスト･音楽ライター　船越清佳　様

世界から才能が集まるパリで、長年ピアニストとして活躍している船越清佳さん。文筆家としての顔もお持ちで4年前に出版された『フランス人は仕事に振り回されない』は、今まさに変化の渦中にいる私たちにとって多くのヒントがありました。
(インタビューは2020年2月に日本帰国の際に伺ったものです)

フランス人の仕事哲学

勤勉なイメージの日本人とヴァカンス好きのフランス人。労働生産性の世界ランキングを比較するとOECD(経済協力開発機構)のなかでは、日本　21位(2018年)に対してフランス　8位と圧倒的に高い。この差の原因はどこにあるのだろうか。まず伺ってみた。

▶フランスの法定労働時間は週35時間(日本は40時間)で、有給は5週間。日曜営業が解禁になったのも近年のことです。フランス国民は働くのが嫌いというのは必ずしも正しいとは思いません。時間をかけて仕事をすることを美徳とせず、手早く効率的にこなすのが彼らの基本精神のようです。仕事は時間内でさっさと切り上げて、それ以降の時間は家族や友達との時間を大切にし、また趣味に打ち込んだり、映画やコンサートに行ったりしています。

私のピアノの生徒さんに、大手の保険会社で重役をされている女性がいるのですが、毎週一度、仕事の後きっちりとレッスンにこられ、練習にも熱心です。ご家族もいらっしゃるし、お忙しい中を無理をされているのではと思いきや、1日の終わりに別なことをするのは「疲労回復」になるらしく、「ピアノが無くなったら、定年後がつまらなくなるわ」といつも言われるのです。こういう時間の使い方はとてもメリハリが利いていると思います。人生を楽しむために働くというのが根底にあって、仕事を愛することと人生を楽しむことは両立できると考えているのです。

インスピレーションの源はプライベート

本の中にも紹介されているが、企業トップでありながらピアノリサイタルを定期的に行なったり「平家物語」を愛読するビジネスエリートなど登場するがこれは一部のフランス人の話なのだろうか。

▶以前、フランスの文化相がノーベル文学賞をとったばかりのフランスの作家について質問されて答えられず「忙しくて読書する時間がない」と弁解して、世論から顰蹙(ひんしゅく)を買ってしまったことがありました。

フランスでは「リーダー的な地位を担う人は、豊かな教養の持ち主でなければならない」という考えが浸透しています。ここでいう教養とは、学識はもちろん、文学、宗教、芸術からスポーツに至るまで、幅広いものを指します。物事を多面的にとらえ、複雑な社会のあらゆる層に想像力をもって接する人間性がリーダーには問われると考えるからです。

▶OECD日本政府代表大使としてパリに赴任していた大江博さん(今は在イタリア大使)もそんなおひとりです。外交官でありながらピアニストとしての顔もお持ちの大江さんに取材したとき、昔アメリカの国務副長官だったR・アーミテージ氏との面会の忘れられないエピソードを披露してくださいました。
https://dot.asahi.com/aera/2019051400025.html?page=1(※アエラ「演奏で深めた各国交流」)

「その気になれば時間は作れます。人生に仕事と違う世界に没頭する時間は必要ですし、仕事以外に情熱を注ぐものを持つ人には『また会いたい』と思わせる何かがある。それが結果として仕事にもつながっていくのだと思います」(※上記記事より大江氏談を抜粋)　　と、いう言葉が強く印象に残りました。趣味でさえも目標高く自分磨きにつなげていらっしゃるのです。人としての魅力は、常に好奇心を失わない充実したプライベートに秘密があるのではと感じます。

ピアノがひらいてくれる扉

船越氏のお話しのなかには「ピアノがひらいてくれる扉」という言葉が度々登場する。船越氏にとってピアノの魅力はどんなところにあるのだろうか。

▶私は今、大勢の子供たちにピアノを教えていますが、ピアノを達者に弾くことよりも、ピアノを軸とした様々な芸術分野への関心、微小なことや、言葉で言い表せないものに感動する心、曲をマスターする過程で、受け身ではなく自分から問題解決意識を持つて取り組む自立心を培いながら「こころの柔軟性」を育てたいと思っています。音楽を始め、芸術が開いてくれる豊かな世界を知ってほしいのです。

▶翻訳作業中の小説に多くのヒントがありました。アマチュアピアニストの学生が、あるピアノ教師との出会いによって、自分の理想の表現方法----彼にとっての天職----に気付いていくという物語です。始まったレッスンも奇妙で、例えば「朝公園に行って、朝露をこぼさないように花を摘む練習をしなさい」「静寂に耳を傾けなさい」といった一見ピアノとは関係なさそうな課題が次々に出されなかなかピアノに触らせてもらえません。反発しながらも、だんだん今までは素通りしていた自然の美しさや、人と深くかかわり合うことのすばらしさに目覚めていき、それにつれて、始めは硬かった指もだんだんしなやかになり、繊細な音色が得られるほどに成長を遂げていくのです。
その経験の積み重ねが、作家としての成功へと導いていく……。

このように、一見無関係のようでも、実は学んだことが血となり肉となり、世界を広げてくれる、これが音楽の魔力ではないでしょうか。私にとっても、今執筆でもお仕事させていただけるのは、ピアノが開いた扉そのものです。

フランスの哲学教育「バカロレア」

フランスは文化政策がすぐれていることでも有名だが、高校3年の最後の1年間、哲学の授業があることも船越氏にとってはフランスの魅力だという。バカロレア(高校卒業、大学入学資格試験)の試験問題「例　文化は人をさらに人間的にするか?」日本人はどんな解答を出せるだろうか。

▶バカロレアの中でも、この哲学の授業は恐れられています。なぜなら明確な基準がないから(笑)哲学を通して学ぶのは、自分なりの筋の通った思考形成法です。試験では、学んだことをベースにどこまで論理的に展開できるか、現代社会の問題と関連づけて考察できるかが求められます。
前述の本の執筆中、アンヌ・サンクレールというフランスの著名な政治ジャーナリストに取材したのですが、「芸術関係の人の中には、自分の新曲や新作の話はできるけれども、世界情勢のことに関しては何の意見もない人がいる」と言われたのに、非常に耳の痛い思いをしました。世界中がコロナ危機で前代未聞の状況に陥った今、すべての人が「打撃を受けた社会を立て直すために、微力でも自分ができることは何か」を考えていかなければならないですね。

パリに暮らして

フランスに暮らして今年で30年になるという船越氏だが、パリの魅力、外から日本をみて感じること、また今回の世界的なパンデミックによって思うことなど、後からメールで交信して頂いた。

▶もとより福祉が充実しているフランスですが、ほぼ2か月続いたロックダウン中、国家が国民の給料を迅速に補償した経済援助は、さすがだと感じました。通常生活の兆しが見え始めた現在、友人たちを自宅に招きあって、ワインを楽しみながらおしゃべりする習慣が戻ってくると思うと、嬉しくなります。

インタビューを終えて

日本人としてのアイデンティティを大切にしながらも、船越さんとお話ししているとフランス人の気質も垣間見え、ハッとするような瞬間がたびたびありました。
「音楽は命は救うことはできないが、魂を救うことはできる。パンデミックが終結したとき、音楽の力、生演奏の音色は打撃を受けた社会を立て直す原動力となるに違いない」 そう語る船越さんにプロの音楽家の力強い言葉を感じました。